

# カッシオドルス『綱要』への新たな視座

— カロリング期の図書館カタログとの関連から —

北村直昭

## はじめに

カッシオドルス (Cassiodorus, Flavius Magnus Aurelius ca.490-583) は、ボエティウスとならんで古代の知識がヨーロッパ中世へと伝えられる際に大きく寄与した人物としてよく知られている。かれは東ゴートのテオドリクスらのもとで活躍したが、政治から引退したのち、イタリア南端の故郷カラブリア地方に聖書研究を活動の中心としたウィウアリウム Vivarium と呼ばれる共住制修道院を創設した。その修道院での聖書研究の手引きとして書かれた、一種の文献ガイドでもある『綱要』 *Institutiones divinarum et saecularium litterarum* については、古くから関心をもたれ研究されてきた<sup>1</sup>。しかし、20世紀の前半からの研究でさ

---

<sup>1</sup> ラテン語テキスト、現代語訳は以下を参照。R. A. B. Mynors (ed.), *Cassiodori Senatoris Institutiones*, Oxford 1937; L. W. Jones (tr.), *An Introduction to Divine and Human Readings by Cassiodorus Senator*, New York 1966. また第1巻の序文, 10, 29章および第2巻全体が邦訳されている。カッシオドルス『綱要』田子多津子訳『中世思想原典集成5, 後期ラテン教父』上智大学中世思想研究所編訳, 野町啓監修, 平凡社1993年, 336-417頁。カッシオドルスに関する研究一覧は J. J. O'Donnell, *Cassiodorus*, University of California Press 1979, pp. 274-296 (著者はインターネットを活用していることでも知られているが, Webサイト上で1995年の“Postprint”があり1979年以降の文献リストも掲載されている (www.georgetown.edu/faculty/jod/))。わが国の研究で『綱要』を主題的に論じたものとしては, 岩村清太氏の一連の論考がある。岩村清太「修道生活への学習活動の導入とその背景-1-カッシオドルスによる」『大東文化大学紀要人文科学』19号(1981年)1-16頁; 「ウィウアリウム修道院の独創的学習活動とその背景」同前, 20号(1982年)345-362頁; 「カッシオドルスの自由学芸観, 『聖・俗教範』を中心に」同前, 22号(1984年)323-340頁。

まざまな角度から論じられてきたために、カッシオドルスについての評価は、良い意味でも悪い意味でもすでに定着してしまった感が否めない<sup>2</sup>。

ところで、『綱要』が当時の書物について証言する史料である一方で、現存する写本も当時の書物についての物質的な史料である。それらを研究する中世初期の写本研究も、20世紀において飛躍的な発展を遂げている<sup>3</sup>。その成果の中で、『綱要』との関連で重要なものはじつに多い。たとえば、文字を分析するパレオグラフィーの発展などにより、議論の尽きないウィウアリウム修道院の図書館に由来する写本の問題についてより確かな議論ができるようになった<sup>4</sup>。これまで蓄積された写本および書物文化についての研究成果を見てみると、あらためてカッシオドルスの『綱要』、とくにその第1巻を研究する意義があると思われる。

また、歴史研究からは、「書かれたことば」が重要な役割を果たすようになる時期についての認識を大きく修正する研究が相次いで発表されて

<sup>2</sup> この時期の研究で代表的なものとしては、上述の『綱要』の批判版のテキストや英訳刊行のほか、A. van de Vyver, *Cassiodore et son oeuvre, Speculum* VI (1931), pp. 244-292; P. Lehmann, "Cassiodorstudien", *Philologus*, vol. 71 (1912), S. 278-99; vol. 72 (1913), S. 503-17; vol. 73 (1914), S. 253-73; vol. 74 (1917), S. 351-383 などがある。

<sup>3</sup> 中世初期のパレオグラフィーの研究に重要な E. A. Lowe (ed.), *Codices Latini Antiquiores, A Palaeographical Guide to Latin Manuscripts Prior to the Nineth Century*, pt. 1-11 and Supplement, Oxford 1934-1971 [=以下 CLA と略] の刊行のほか、おなじく Lowe, *The Beneventan Script; A History of the South Italian Minuscule*, Oxford 1914 もイタリア起源の写本に関する知識の深化に大きく貢献した。この間、マビヨンの時代以来、古文書学の一部であったパレオグラフィーは、文学的テキスト、コデクス(冊子本)に書かれたテキストをもその対象に含み多くの成果をあげてきた。また、コデクスの構造を分析するコディコロジーも20世紀の半ばに誕生し、多くの成果があがっている。伝統的に歴史学の補助学と位置づけられていたこれらの領域からの成果は、歴史学にも刺激を与え、新たな課題設定を促すまでにいたっている。わが国ではヨーロッパ各国における20世紀の写本研究の飛躍的な進展については、まだ十分に知られていないように思われるが、これについては別稿で近く論じる予定である。

<sup>4</sup> F. Troncarelli, *Vivarium, i libri, il destino: Instrumenta Patristica*, XXXIII, Turnhout 1998.

いる<sup>5</sup>。その中でカロリング期における図書館カタログ編纂や、カタログ内での著作の配列の仕方についての個別研究が総合的に展望されたことで、それらのもつ意味と重要性が浮き彫りになってきている。

その結果、本稿でのちに紹介するように、中世初期の図書館カタログの編者の方針は、その後の図書館カタログ編纂の方針とも共通点が多く、前者が後者のモデルになっている可能性があることが分かっている。そればかりか、この時期のカタログ編纂とは、単に著作の配列の順序を定めたことに尽きるのではなく、中世の知の枠組みや構造をも定めたことでもあると評価されるにいたっている。また、同時代のカタログ編纂においては、相互に関係をもつ修道院の間でも影響があることが確認されている。

このような中世初期のカタログ編纂の活動と、カッシオドルスの『綱要』、とくに第一巻はとりわけ密接な関わりをもっている。中世初期の図書館カタログの研究が進み、その重要性が明らかになった現在、いまいちどカッシオドルスの『綱要』についての文献学的な研究の成果を、カロリング期の図書館史研究の成果と照合することは意味のあることであろう。

本稿では、はじめに『綱要』第1巻とカロリング期の図書館カタログとの関係について、つづいてカロリング期の図書館の組織化について近年の研究から明らかになったことをまとめながら論じていく。さいごに、これらの研究成果をふまえて第1巻を中心に『綱要』を研究するためのあらたな視座について論じてみたい。

---

<sup>5</sup> R. McKitterick, *The Carolingians and the Written Word*, Cambridge 1989; R. McKitterick (ed.), *The Uses of Literacy in Early Mediaeval Europe*, Cambridge 1990. 佐藤彰一「識字文化・言語・コミュニケーション」『西欧中世史 上巻 継承と創造』佐藤彰一、早川良弥編著、ミネルヴァ書房 1995年、215-237頁。

## 1 ムールバッハ修道院の9世紀の図書館カタログ

### 史料と研究史

現在、ムールバッハ修道院図書館の9世紀半ばの図書館カタログについて、当時の写本としては現存しないが、その内容を伝える間接的な史料がのこっている<sup>6</sup>。1464年に紙に書き写されたものがそれである<sup>7</sup>。書き写した人物は15世紀に活躍した人文主義歴史家のジギスムント・マイスタリンと特定されている<sup>8</sup>。このカタログの写しには古くから関心もたれてきたが、1968年にW. ミルデによって研究史の概観と文献学的考証とともにカタログ全てが刊行され、その全貌と詳細が明らかになった<sup>9</sup>。

<sup>6</sup> 史料と研究史についてはW. Milde, *Der Bibliothekskatalog des Klosters Murbach aus dem 9. Jahrhundert. Ausgabe und Untersuchung von Beziehungen zu Cassiodors "Institutiones". Beihefte zum Euphorion. Zeitschrift für Literaturgeschichte 4. Heft*, Heidelberg 1968, S. 8-34を参照。それ以前の研究の中でこのカタログの研究を大きく進めたものとしてH. Bloch, *Ein karolingischer Bibliothekskatalog aus Kloster Murbach*, in *Strassburger Festschrift zur XLVI. Versammlung deutscher Philologen und Schulmänner*, Der Philosophischen Facultät der Kaiser-Wilhelms-Universität (Hrsg.), Strassburg 1901を参照。

<sup>7</sup> 現在の所在: Cormar, *Archives Départementales du Haut-Rhin: Caltulaire Abbay Murbach No. 1*, pp. 86-96 (fols. 44v-49v), (1871年から1918年まではColmar, Kaiserliches Bezirksarchiv des Ober-Elsaß, Kartular Abtei Murbach, Nr. 1)。なお、カタログを写した部分全体の白黒写真が、ミルデによる版の巻末に収録されている (Tafel 1-13)。

<sup>8</sup> Sigismund Meisterlin, 1434年頃~1489年以後。このカタログを書き写した人物について論じたものに、P. Joachimsohn, *Die humanistische Geschichtschreibung in Deutschland, I, Die Anfänge. Sigismund Meisterlin*, Bonn 1895がある。この人物についての簡略な記載は *Lexikon für Theologie und Kirche*, 2. Auflage Bd. 7, Freiburg 1962, S. 246-47を参照。手紙でFrater Sigismundusを名乗っている人物がカタログを書き写したと考えられているが、ジギスムント・マイスタリンの他の手紙との筆跡の照合によって同一人物であることが分かっている。

<sup>9</sup> Milde, *op. cit.* また、おなじくムールバッハの9世紀の図書館カタログを論じたものにK. Geith, W. Berschin, "Die Bibliothekskataloge des Klosters Murbach aus dem IX. Jahrhundert", *Zeitschrift für Kirchengeschichte*, 83:1 (1972), S. 61-87もある。

このカタログの写しは、9世紀のムールバッハの図書館の間接的な史料でしかないため、失われたオリジナルのカタログとの関係についていくつかの点を確認しておく必要があるだろう。カタログの写しと一緒に綴じられている手紙の記述から考えて、15世紀に書き写された当時は、オリジナルがまだ修道院に所蔵されていたと考えられている。そのため、オリジナルとの隔たりはさほど大きなものではないと考えられている。ただし、書き写されたカタログのテキストにはいくつかの誤りや改竄の痕跡があることも事実である。

たとえば、カタログに記載されている著作タイトルの綴りに書き誤りがいくつかあるほか、書き加えによる改竄も一部ある。ムールバッハの9世紀のカタログ編者は、後で述べるように文献に関する情報をほかの典拠から引用して文献を列挙することがあり、そのためカタログの記載に相応しくない人称の動詞がカタログの中でもそのまま使われることがある。ジギスメントが加筆したのは、このような部分に遭遇した時に、辻褃を合わせようとしたことだったと明らかになっている<sup>10</sup>。しかし、このような改竄はごく限られたものであり、これまでの研究によって改竄された箇所とその理由についても明らかにされている。したがって、この15世紀の写しは、失われたオリジナルのカタログの姿を知る上で信頼に足る史料であり、これにもとづいて、9世紀ムールバッハ修道院図書館のカタログを論じることができる。

## 特徴

まず、このカタログの形式的な特徴として、著作は作家ごとに見出しによって分類されている。その見出し項目を順に列挙すると以下の通りである（括弧内のアラビア数字、ローマ数字はミルデ版のもの）<sup>11</sup>。

<sup>10</sup> Milde, *op. cit.*, S. 13-14.

<sup>11</sup> ここでは、カタログに記されている見出しをそのまま抽出しているので、見出しの著者名のあとにある数字を見れば、その作家の作品が何点あるかが分かる。ただし、カタログ編者による各著作に当てた執筆者名は当時のものであるため、偽書が含まれていたり、現在では別の著者によるものであることが判明している場合もある。数字の割り振られた各著作の正しい著者名と、現在参照できる版については、Milde, *op. cit.*, S. 49-61を参照。

キプリアヌス (1-14), ヒラリウス (15-20), アンブロジウス (21-34, I-Vb), ヒエロニムス (35-61, VIII-XII), アウグスティヌス (62-80, XIII-XIX, 81-115, XX-LI, 116-135), オリゲネス (136-141), バシリウス (142-144), ヨハネス・クリソストモス (145-155), 大グレゴリウス (156-163), イシドルス (164-178), ベーダ (179-199, LII-LXXIII), カッシオドルス (200-206), ヨアンネス・カッシアヌス (203-206), プロスペルス (207-209, LXXIV-LXXV), プリマシウス (210-LXXVI), トレドのユリアヌス (211-213), ナジアンスのグレゴリウス (214-231), ポエティウス (232-242), アルクイヌス (243-258), ラバヌス・マウルス (259-269), 歴史書 (270-276), キリスト教詩人 (277-290), 異教著作 (291-304), 異教詩人 (305-330), 医学 (331-335)

この配列は、他の9世紀の図書館カタログと比べて共通点があることが指摘されている。聖書と典礼用書籍への言及がない点をのぞくと、このカタログは著者ごとに分類され、主題にもとづいて配列されている。その点では、ロルシュ、ザンクト・ガレン、ライヘナウ、サン・リキエのカタログともおなじである<sup>12</sup>。

一方、この図書館カタログはおなじ時期の他のカタログと比べると明らかな特徴をもっている。それは、所蔵している著作のタイトルだけでなく、収集希望図書についての指示を豊富に含んでいることである<sup>13</sup>。編者はカタログを編纂する際に、その図書館ではまだ所蔵していない収集希望図書の情報をどうやって知ることができたのか。これは、編者のカタログ編纂の方法を明らかにするための手がかりの一つになりうる情報であり、所蔵している著作とは別の観点から文献学的に考証する必要のあるものである。

9世紀ムールバッハの図書館カタログを研究した研究者たちはそれぞれ

<sup>12</sup> McKitterick, *Carolingians...*, p. 193.

<sup>13</sup> たとえばフライジングやロルシュの図書館カタログにもおなじような指示がわずかに見られるが、その数と質において、ムールバッハのカタログのそれは際立っている。詳しくは Milde, *op. cit.*, S. 106-109 を参照。

れこの点に注目しており、収集希望図書リスト *Desiderataliste* という分析概念が用いられるようになった。これは、当時のムールバッハ図書館で所蔵されていた著作のほかに、所蔵することが望ましい著作として言及されたものの全体を指すものである。

この「収集希望図書リスト」とは、あくまでも分析のために導入された概念であり、実際のカatalogに蔵書カatalogや収集希望図書リストなどの部分があるわけではなく、すべてが混然一体となっている。そこで、W. ミルデはカatalogのテキストを刊行するにあたって、図書館が所蔵していた著作にはアラビア数字(1-335)、探して入手すべき著作にはローマ数字(I - LXXVI) を添えて便宜をはかった。

335点の著作が所蔵されていたこと自体、9世紀のアルザス地方の蔵書の豊かさを示す貴重な証言であるが、収集希望図書リストは、この図書館に所蔵されていた著作が何であったか以上の情報を与えてくれる。

ムールバッハのカatalogに顕著な特徴である収集希望図書リストがどのようなものかを見ると、収集が希望されている著作は特定の著者、すなわちヒエロニムス、アンブロジウス、アウグスティヌス、ベーダのものに集中していることがわかる。カatalog編者が手もとにない著作の存在とその題名などの情報をどのようにして知ったのか、つまり何を典拠としてカatalogを編纂したのかについては、ブロッホの研究とそれをさらに詳細に吟味したミルデの研究により説得力のある根拠が提示されている。かれらの研究から、この図書館カatalogの編纂の方法までもが明らかになっている。

### カatalog編者の典拠

アンブロジウスの著作については6点がアウグスティヌスの『ユリアヌス駁論』*Contra Julianum*<sup>14</sup>に、のこる1点はカッシオドルスの『綱要』

<sup>14</sup> 『ペラギウス派駁論集(4)』金子晴勇訳『アウグスティヌス著作集』第30巻、教文館2002年。ムールバッハにも所蔵されていたことがカatalogの記載により裏付けられる(ミルデ版 Nr. 111)。『イサクと魂』は邦訳63, 82頁、『ノアについて』は68頁、『再生のサクラメントあるいは哲学について』は84, 86, 90, 91, 97頁、『預言者イザヤの注解』は94頁、『現世からの逃避について』は96頁で書名が言及されている。

にもとづいており、ヒエロニムスについても典拠不明の1点をのぞく4点が『綱要』にもとづいている<sup>15</sup>。

アウグスティヌスの著作については、このカタログの中では例外的に編者が自ら典拠を明記しており、『再考録』*Retractationum*<sup>16</sup>にもとづいていることが分かっている。『再考録』とは、アウグスティヌスが自らの著作を振り返って、427年までの著作の中で犯した誤りを訂正する意図で書かれたものである。それが結果的に、アウグスティヌスの著作一覧としても使えるものとなり、実際に中世初期においてそのように利用された。

上に挙げた著者見出しで、アウグスティヌスのみ所蔵著作、収集希望著作が交互にあらわれているのは、『再考録』の第1巻、第2巻で言及されている著作がそれぞれ列挙されているからである。ただし、『再考録』では説教と書簡には触れられていないが、ムールバッハでは所蔵しているものがあるので、その末尾に加えられている。なお、この『再考録』はカタログ編者自身が、典拠として用いたことを明言しているにもかかわらず、カタログ中『再考録』の記載がない。これについては、いくつかの可能性が示唆されてはいるが、決定的な理由は不明のままである<sup>17</sup>。

ベーダの著作についても、ベーダ自身が一種の著作リストをのこしており、編者はこれを利用している。主著『アングル人の教会史』*Historia ecclesiastica gentis Anglorum*のおわりに近い第5巻第24章において、ベーダが自らの略歴と著作を述べている箇所である<sup>18</sup>。ムールバッハの

<sup>15</sup> 『綱要』はもちろんカタログに記載されており、ムールバッハ図書館に所蔵されていたことが確認できる（ミルデ版 Nr. 201）

<sup>16</sup> *Retractationum libri II*, A. Mutzenbecher (ed.), *Corpus Christianorum Series Latina* 57, Trunhout, 1984. 邦訳は『アウグスティヌス著作集 全30巻』（教文館、1979年～）の対応する著作の末尾に分割して収録されている。

<sup>17</sup> 編者が『再考録』を利用していることを明記しているにもかかわらず、その名がカタログに記載されていない理由については仮説の域をこえる議論がでていない。Milde, *op. cit.*, S. 85; Bloch, *op. cit.*, S. 281.

<sup>18</sup> ベーダ『イギリス教会史』長友栄三郎訳、創文社1965年、451-459頁。ムールバッハのカタログにも記載されておりミルデの版 Nr. 193 がそれにあたる。



カタログでは、奇妙なことに著作のタイトルが主格ではなく対格で表記されている。その理由については、『教会史』の文脈においてベータは自らの著作を挙げているために一人称の文中でタイトルは対格となっており、この表現がそのままカタログに入ったという説が有力である<sup>19</sup>。そのほかプロスペルス、プリマジウスについてはカッシオドルスの『綱要』が典拠になっている<sup>20</sup>。

ここで注目すべきことは、カタログ編者が典拠として利用した著作のうち『綱要』以外はどれも、文献目録として利用されることを意図して書かれたものではない点である。中世の文学作品や著述の方法として古代のモデルを利用して模倣するという方法が、図書館カタログ編纂の場合にもとられたと考えることができるかも知れない。その場合、ムールバッハの編者がモデルとして利用できるものとしては、著作の本来の執筆意図から考えて、『綱要』がもっとも好都合で、頼りになるものだったことは明らかである。

編者が『綱要』をモデルにしてカタログを編纂したのであれば、両者の間には密接な関係がみとめられるはずである。編者はどのような方法でカタログを編纂したのだろうか。

### 編纂の方法

ブロッホとミルデの研究により、ムールバッハの図書館カタログ編者が典拠としたものが解明されると、ミルデがさらに典拠とカタログの文献学的考証を進め、このカタログがどのように編纂されたかをも明らかにした。その研究によると編者はこのカタログを編纂する際に文献資料をもとにしており、その一部はカタログそのもののモデルとして利用している。

一般論として、図書館カタログを編纂するには必ずしも何らかの文献資料を参照する必要はない。その図書館が所蔵している著作に関しては、手もとにある写本をもとに、著者と題名を書き留めていくことでカタログを編纂することができる。また、その図書館で所蔵していない著作に

<sup>19</sup> Milde, *op., cit.*, S. 94-96.

<sup>20</sup> Milde, *op., cit.* S. 98-99; Bloch, *op., cit.*, S. 268.

関しては、交流のある他の修道院の図書館で蔵書を比較することで、カタログの中に収集希望図書リストを作成することも考えられる。

しかし、実際のところ編者はカタログの中で、アウグスティヌスの著作に関しては『再考録』を参照したことを述べており<sup>21</sup>、当時のムールバッハの図書館で所蔵していたアウグスティヌスの著作についても、その配列の順序は『再考録』にもとづいている。また、編者が明言していないところでも、先に述べたベーダの例では格変化が元の文脈の中にあっただまにのこされていたために、『アングル人の教会史』から引用していることが明らかになった。

また、カタログのいくつかの記載は、ところどころで典拠の中にある誤った文献情報が入り込んでいることが確認されている。たとえば、オリゲネスによる『民数記』への説教ではその数 29 とあるが、これは『綱要』の中でも 29 と言及されており、両者に共通の誤りである<sup>22</sup>。これに類する諸事実から、編者が文献資料に依拠しながらカタログを編纂したことは確実である。

### カタログと『綱要』の関係

カタログ編者は、カッシオドルスの『綱要』を文献情報を引き出す典拠としてだけでなく、カタログのモデルとして利用した形跡も見いだされる。ムールバッハのカタログの特徴は、収集希望図書リストや、著作の探求指示が数多く含まれていることであることはすでに述べた通りである。じつは、この種の指示は『綱要』にも数多く含まれており、その関係が注目される<sup>23</sup>。

『綱要』は聖書研究の手引きであることに加え、カッシオドルスが創設した聖書研究に重点をおくウィウアリウム修道院にいる人々を直接の対象に書かれたものでもある。そのため、『綱要』に含まれる文献案内は、言及される各々の著作がウィウアリウムの図書館にあるかどうかにも触れて、当該著作が所蔵されていない場合は、探すべきであることが記さ

---

<sup>21</sup> Milde, *op.*, *cit.*, S. 38-39, 81.

<sup>22</sup> Milde, *op.*, *cit.*, S. 86-87.

<sup>23</sup> Milde, *op.*, *cit.*, 62-130.

れている。たとえば、ある著作家の著作が足りない場合、後に入手できたときにはそこへ書き込むようにという指示とともに、そのために余白をのこしていることも説明している<sup>24</sup>。したがって、『綱要』そのものがウィウァリウム修道院の図書館カタログの性格も備えているのである。

9世紀の他の図書館カタログでは、ムールバッハのカタログにあるような詳しい収集希望図書リストがあるものは例がないことから、カタログを編纂する上での収集希望図書を指示することは、9世紀の慣習として一般的なものではなかった。このことから、ムールバッハのカタログ編者は『綱要』の中の収集指示から着想を得て、自ら編纂しているカタログにも探究図書についての指示を書き入れたのではないかと推測することができる。

これについて、ミルデはカタログの中で探究指示に使われる表現に着目して、『綱要』の表現との比較を行った<sup>25</sup>。かれの比較によれば、ムールバッハのカタログで15箇所にあられる探究指示の表現を見ると、「探す」*quaerere*と「求む」*desiderare*、その他の表現がある。カタログでは*quaerere*が8回用いられるのに対して、『綱要』では1回のみである。しかし、『綱要』では*quaerere*から派生した*perquirere*が3回、*requirere*が2回、*inquirere*が1回用いられている。カタログ編者がより簡略化した表現が適切と考えたのであれば、これらの表現にはある程度の類似が認められるだろう。その他にもこれらの動詞が*adhuc*とともに用いられるケース、奪格とともに用いられるケースがあるなど、用法の点でも両者には類似が認められる。

一方、動詞*desiderare*については、カタログ編者が4回用いているのに対して、カッシオドルスは一度も用いておらず、副詞の形で*desideranter*が1回用いられているのみである。しかし、カタログ編者も*desiderare*よりも*quaerere*の方を2倍の頻度で使っており、*quaerere*とその派生語の方が頻出する点は両者に共通する。

カタログでは、この二つの動詞以外に収集希望図書、探究指示にあられる表現として「望む」*cupere*、「所蔵せず」*non habemus*、「欠けて

<sup>24</sup> 『綱要』第1巻第2章12 (Mynors, *op., cit.*, p. 18) など。

<sup>25</sup> Milde, *op., cit.*, S. 110-118.

いる」desse が用いられているが、これらは『綱要』では用いられていない。反対の意味で「欠けていない」non desunt という表現が一度使われているのみである。これらの表現が『綱要』にはないのは、カッシオドルスは必要とする著作が未入手の場合には、「まだ見つかっていない」、「いまなお見つけられるべきである」など、それを探していることをはっきり表現していることによる<sup>26</sup>。

このように、両者は探究を指示する表現において、異なる点も少なくないが、語彙の選択の全体的な傾向としては、偶然の一致と考えることのできないほどの類似がある。

また、両者が完全には一致しないことについては、『綱要』以外の典拠からの場合にも、編者はそのまま引用することをせずに、少しずつ改変してからカタログに記載していたことから類推すれば、『綱要』を典拠とする場合も編者がおなじように表現に手を加えたと考えても無理はない。

おそらく、編者は『綱要』を参照しながら、図書館カタログの編纂という目的に合わせて、ことばや題名を少しずつかえながらカタログを編纂したのだろうと考えられる。また、同時期のカタログには詳しい記載をとまなう探究指示が稀であることと、カタログ編者がはば広く『綱要』を典拠として用いていることから、このような指示をカタログに入れること自体が『綱要』からの直接の影響を示唆しているのである。

## 2 中世初期研究と図書館カタログ

### 社会的、文化的コンテクスト

ここまで、9世紀の図書館カタログとしてムールバッハ修道院図書館のカタログに注目し、それがどのように編纂されたのか、これまでの研究で明らかになったことを概観してきた。そのなかで、このカタログの編者は、文献資料にもとづいて図書館カタログを編纂していること、また、典拠とされた文献史料の中では、カッシオドルスの『綱要』が文献に関する情報源としてだけでなく、カタログのモデルとしても利用され

---

<sup>26</sup> 『綱要』の中での探求指示に使われている表現の全ての用例は Milde, *op. cit.*, S. 111-114 に網羅的に示されている。

ている点でとくに重要な役割を演じたことを述べた。

ムールバッハの事例を中世初期の文化的コンテクストの中に位置づけるために、おなじ時期のほかの図書館カタログについても見ておかねばならないであろう。これについては、R.マッキタリクが研究成果を概観し、この時期の図書館と図書館カタログの研究を中世初期全体の社会的、文化的コンテクストの中に位置づけている点で、きわめて有益な議論の基盤を提供している<sup>27</sup>。

それによれば、この時期は伝統的に考えられたほどには文字文化は失われてはおらず、むしろ、社会の中で「書かれたことば」が重要な役割を演じていた。それは、行政や統治の面だけでなく、学問と教養の面にもあてはまる。また、一部の知的エリート、聖職者ばかりでなく、少なくとも一部の世俗の人々にもその裾野が広がっている。社会の中で文字が重要な役割を演じているという点では、中世初期は古代から断絶するものではなく、むしろ連続するものであると捉えられ、この時期、あらたに社会の中で「書かれたことば」が、組織化されていくのである。9世紀にさまざまな修道院の図書館でカタログが編纂され、しかもそれらが一定の秩序をもつようになっていくのは、このような時代の中でおこった現象の一つである。

### 中世初期の図書館カタログ

メロヴィング期については、図書館や蔵書の規模を正確に知るための

---

<sup>27</sup> 中世の図書館カタログについては、A. Derolez, *Les catalogues de bibliothèques. Typologie des sources du Moyen Age occidental*, fasc. 31, Turnhout 1979がある。現在の図書館カタログとはまったくことなる中世の図書館カタログについて、基礎的な理解のために役立つ点も多いが、中世初期については不十分な点もあり、マッキタリクの議論がこれを補完している。Mckitterick, *Carolingians...*, pp. 165-210. 本稿もこれに多くを負っている。図書館カタログの調査と刊行はドイツとスイスについては Bayerische Akademie der Wissenschaften (Hrsg.) *Mittelalterliche Bibliothekskataloge Deutschlands und der Schweiz*, 4 Bds u. Ergänzung, München 1918-1989がある。フランスの中世初期の図書館についての概説は、*Histoire des bibliothèques françaises, Les bibliothèques médiévales; Du VI<sup>e</sup> Siècle à 1530*, A. Vernet (dir.) Paris 1989を参照。

十分な史料はのこっていない。しかし、カロリング期の最初期の図書館カタログとして、8世紀なかばから8世紀末にかけてのカタログはいくつかのものがのこっている。うち3点は当時の写本でのこっているヴェルツブルク<sup>28</sup>、フルダ<sup>29</sup>、カール大帝の宮廷図書館のカタログ<sup>30</sup>であり、1点は9世紀の年代記の中に含まれている聖ワンドリル修道院のものである<sup>31</sup>。

そのうち、744年に創設されたフルダの修道院の図書館カタログでは約20点が記載されている。まだ総合的な図書館の姿にはいたっておらず、宣教活動のために厳選された蔵書ともなっていない。しかし、注目すべきは、このカタログが教会財産目録から明らかに独立している点であり、図書館の蔵書目録の歴史において大きな一歩とみることができる。また、この当時のカタログの蔵書に関しては、他所から持ちこまれたものが多いことも注目に値する。

<sup>28</sup> ヴェルツブルグのカタログはアウグスティヌスの『三位一体論』*De Trinitate*の8世紀の写本 Oxford, Bodleian Library, Laud. Misc. 126の末尾にのこされた余白 (fol. 260r) に800年頃のアングロ＝サクソンの手で書き記されている。詳しくは E. A. Lowe, “An Eighth-Century List of Books in a Bodleian MS. from Würzburg and its Probable Relation to the Laudian Acts”, *Speculum*, vol. 3, No. 1 (1928), pp. 3-15 (Reprinted in *Palaeographical Papers*, 239-50, pl. 27-30) を参照。

<sup>29</sup> フルダのカタログを含む写本はオリジナルの製本を留めているイシドルスの著作集の写本 Basel, Universitätsbibliothek, F. III. 15a (CLA VII, 842) に含まれている (fols. 17v-18r)。P. Lehmann, *Fluder Studien: Sitzungsberichte der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, München* 1925, S. 48-49; McKitterick, *Carolingians...*, p. 169.

<sup>30</sup> 宮廷図書館のカタログが一部がのこされている。Berlin, Staatsbibliothek, Diez B. Sant. 66 (cf. CLA, VIII, 1044)。B. Bischoff, “Die Hofbibliothek Karls des Großen”, *Karl der Große: Lebenswerk und Nachleben, II: Das geistige Leben*, Düsseldorf 1965, S. 42-62; rep. *Mittelalterliche Studien* 3, Stuttgart 1981, S. 149-169; English translation, “The Court Library of Charlemagne”, in *Manuscripts and Libraries in the Age of Charlemagne*, M. GORMAN, tr., Cambridge 1994, pp. 56-75.

<sup>31</sup> サン・ワンドリル St. Wandrille のカタログは修道院長の寄贈またはそこで作成された書物の記録が修道院年代記のなかのにのこされている。*Gesta abbatum Fontanellensium*, recensuit S. Loewenfeld, Hannover 1886.

ヴェルツブルクにも、カテドラルの図書館にあった34点の書物のリストが作成されている。E. A. ローはこのリストの配列がまったく無秩序ではないが独特であることを指摘した<sup>32</sup>。おそらく、その写本の古さゆえに使徒行伝がカタログの先頭におかれていることのほか、この地のイングランド人の共同体にとって重要な著作が優先された配列になっている。ヴェルツブルクのリストに含まれる何点かの著作は他所でも所有されており、何らかの影響があったと考えられている。しかし、フルダとヴェルツブルクのリストの構造と配列は、フランク王国の他の図書館カタログへは影響していない。この点は、カール大帝の宮廷図書館コレクションの部分的なリストも同様である<sup>33</sup>。

図書館カタログ、あるいは著作リストの構造と配列に一定の方式がとられるようになる例を示しているのが、聖ワンドリル修道院の第2の図書館カタログである。マッキタリクは、このカタログには一定の配列の仕方が試みられているがまだ十分には洗練されていないため、図書館カタログ発展の初期の段階と見なしている<sup>34</sup>。

9世紀に入ると修道院内のスクリプトリウムでの自前の写本生産が活発化し、それにとまって図書館も充実していく。ただし、西フランクの主だった図書館の9世紀から現存するカタログは、残念ながらサン・リキエのものをのぞいてのこっていない<sup>35</sup>。一方、東側ではここまで論じてきたムールバッハのほか、ケルン、ロルシュ、ライヘナウ、ザンクト・ガレンの9世紀のカタログがのこっている。

そして、これら5つのカタログは先にみた8世紀末ごろまでのカタログと比べると、配列の仕方に一定の方式が認められるようになるという。決定的な史料こそないものの、サン・リキエのカタログから類推するかぎり、西側でもおなじく図書館カタログが編纂されており、おそらくはおなじような方式で編纂されていたものと推測できる。また、その方式は豊富にのこっている12世紀のカタログとも共通することから、マッキ

<sup>32</sup> Lowe, "Eighth-Century List ...", pp. 10-11.

<sup>33</sup> McKitterick, *Carolingians...*, p. 172.

<sup>34</sup> McKitterick, *Carolingians...*, p. 175.

<sup>35</sup> McKitterick, *Carolingians...*, p. 176.

タリクはフランクにおけるカタログ編纂がこの時期に確立し、これらカロリング期のカタログがその後のカタログのモデルとなり、11世紀、12世紀のカタログが編纂されたと考えている<sup>36</sup>。その点で、9世紀は図書館の発展のなかで重要な時期だといえる。そこで以下、東フランクにおける9世紀の図書館カタログについて、その編纂の方式を概観してみたい。すなわち、先に見たムールバッハのカタログとほぼ同時代の他の4つ、ライヘナウ、ザンクト・ガレン、ロルシュ、ケルンのカタログである。

ライヘナウでは、そのカタログから9世紀前半に415点所蔵されていたことが分かる<sup>37</sup>。記載される順序は旧約、新約聖書、続いて教父著作、聖人伝、法、歴史、医学、典礼書、その他の教父と中世初期の著作の順になっている。書物のカテゴリーで分類され、それぞれ何巻からなるかも明示され、著者の名前も見出しがつけられている。

つまり、このカタログは一種の主題目録になっており、聖書や神学、実用知識、教会儀式、学校用、修道生活など、書物の役割にしたがって配列されている。また、著者の配列は、その共同体の中でとくに敬愛されている教父が前におかれるなど、部分的に時代順が乱れている。このカタログでは新しく増えていく蔵書への対応はとられておらず、次々に別のリストがつけ加えられていく。

また、ライヘナウとも交流のあったザンクト・ガレンについては850年から860年頃作成されたとされる最古のカタログがのこっている<sup>38</sup>。このカタログも全体的にライヘナウのカタログとおなじように配列された主題別カタログとなっており、ライヘナウからの影響が認められる。

---

<sup>36</sup> McKitterick, *Carolingians...*, p. 176.

<sup>37</sup> ライヘナウのカタログは1630年に転写されたものがのこっているが、オリジナルの写本は消失している。カタログのテキストも刊行されている。*Mittelalterliche Bibliothekskataloge Deutschlands und der Schweiz*, Bd. 1, S. 240-52.

<sup>38</sup> ザンクト・ガレンのカタログはオリジナルA写本St. Gallen, Stiftsbibliothek, 728, pp. 4-21と、そこから筆写されたB写本St. Gallen, Stiftsbibliothek, 267によつてのこされている。これらの写本の解説とカタログのテキストは、*Mittelalterliche Bibliothekskataloge Deutschlands und der Schweiz*, Bd. 1, S. 66-82に収録されている。



ロルシュには、9世紀のカタログとして830年から860年にかけて作成されたものが4点ものこっており、ロルシュがフランクの知的活動においても重要な地位を占めていたことをよく示している<sup>39</sup>。4つのカタログの関係は明らかにされており、第1カタログは830年頃作成された最初期のもので、少なくとも5つ以上の異なる手によって加筆があるほか、著者のセクションごとに空白がのこされている。利用の形跡などからこの第1カタログは図書館司書の写本と考えられている。第2カタログは第1カタログから写されたもので、第2四半世紀に成立したと推定される。そのなかには第1カタログにはない70点の著作も挙げられているが、訂正もわずかで加筆もないなど、利用された形跡とみなせるものがない。そのため、他の場所へ送るか持ち出すために書かれたのではないかと考えられている。9世紀の第3四半世紀のものとする第三カタログは、もっとも包括的なカタログとなっており、写本のなかでも最初に綴じられている。第4カタログは簡略したタイトルのカタログで、わずかに1カイエに第3カタログに記載された大半のタイトルを含んでいる。これはおそらく蔵書を管理するために使われたものと考えられる。

これらのカタログからは、ロルシュの図書館の急速な拡大のようすと、9世紀半ばになると新しい写本の獲得や生産が減少し、その勢いが弱まってくるのがわかる。マッキタリクがこのカタログを検討し、その構造と影響を論じている。カタログの記載の順序は、第1カタログよりも第2カタログでより秩序だったものとなり、レイアウトの面では著者セクションごとに余白がのこされている。一方、第3カタログでは、ライヘナウやザンクト・ガレンのカタログと似た順序で配列されている。

他方、人的交流の面でも、ロルシュはゲルバルドが宮廷でルートヴィヒ1世の厚遇を受け、宮廷の図書館司書として活躍もしており、交流が

---

<sup>39</sup> ロルシュのカタログうち3点を含む写本は Roma, Bibliotheca Apostolica Vaticana, pal. lat. 1877 (第1カタログ: fols. 67-79, 第2カタログ: fols. 40-60, 第3カタログ: fols. 1-34)。この写本はほかにフルダの図書館カタログも含んでいる (fols. 35-44)。第4カタログは Vatican, pal. lat. 57, fols. 1-7。cf. McKittrick, *Carolingians...*, pp. 185-191。ロルシュの写本については B. Bischoff, *Lorsch im Spiegel seiner Handschriften*, München 1974 が詳細に論じている。

確認されている。また、ロルシュはフルダ、ライヘナウ、サン・ヴァーストやおそらくフルダとの人的交流もあったほか、ロルシュの修道院長たちも当時の有数の知識人のもとで学んでいた。この種の交流が各地の図書館カタログ編纂に影響を与えたことも考えられる。

これらのことから分るように、この地ではさまざまな用途のために複数の図書館カタログが編纂されており、記載の順序などにおいて体系化のころみが見られる。これと同時に、当時の宮廷や修道院間の人的交流にも注意が向けられるべきである。すでに言及したように、この時期のカタログにはロルシュの第2カタログのように他所での利用のために書き写されたのではないかと考えられたものもある。図書館カタログの回覧や交換を通じて、カタログ編纂の仕方が相互に影響しあうということも十分に考えられるであろう。また、宮廷と密接なつながりがあったケルンのカテドラル図書館についても833年のカタログがのこっており、全体の配列はこれまで述べたカタログとおなじようになっている<sup>40</sup>。

以上がムールバッハの図書館カタログとほぼおなじ時期、すなわち8、9世紀の図書館カタログについて明らかになっていることである。本稿での関心から、つぎの点を確認しておきたい。確認することのできる最初期の図書館カタログ、すなわち8世紀のカタログにおいては、現在のこっている例をみる限り、記載される著作の順序は、まったく無秩序ではないながらも、一定の規則にしたがった構造はみられない。また、著作家の配列順については、おおむね年代順を反映しつつも、蔵書を利用する共同体が尊重する作家を優先するなどの理由から年代順が乱れる例もみられた。

9世紀になると図書館カタログとその編纂に変化が見られるようになる。この時期はまた、おなじ修道院のスクリプトリウムでの写本生産が活発化し、蔵書の数が増大していく一方で、複数の修道院で共通の著作が備えられるようになっていく。このことを可能にしたのは、修道院間のつながり、すなわち人的交流やカタログや蔵書の貸し借りである。この時期に編纂されたカタログは、簡略タイトルのカタログのように蔵書

---

<sup>40</sup> McKitterick, *Carolingians...*, pp. 191-192.

の管理のために作られたものもあったが、そればかりでなく、他所で利用する目的でも写本が作成される例があったことから分かる。

### 編纂方式の由来とカタログの典拠

中世初期の図書館カタログを俯瞰してみると、編纂方式においておよそ9世紀から一定の方式が導入され、しだいに共有されていくことはここまで見てきた通りである。そこで問題となるのは、このような編纂方式はどこからもたらされたのかという点である。これについてK. ハンフレイは、図書館とその組織化の発展における重要な時期であるカロリング期において、アングロ・サクソン、とくにアルクインの影響がきわめて大きいと論じた<sup>41</sup>。マッキタリクはこの見解は史料による十分な裏付けがなく、むしろ先入観にとらわれた誤解としてこの見解を否定している<sup>42</sup>。マッキタリクは、島嶼部でも大陸でも文化は共有されているとの立場から、書物の供給と図書館の形成、整備に着想を与えたと思われる史料を挙げて検討している。

本稿ではすでにムールバッハの図書館カタログの典拠史料については詳しく述べたが、マッキタリクが指摘している重要な典拠となりえた二つの文献情報についても触れおく<sup>43</sup>。ひとつは『著名者列伝』*De viris*

<sup>41</sup> 島嶼部の役割の重要性を強調したハンフレイの見解、およびそれに対するマッキタリクの反論は以下を参照。K. Humphrey, "The Early Medieval Library" in G. Silagi (ed.), *Paläographie 1981; Colloquium des comité international de paléographie, München, 15.-18. September 1981*, Münchener Beiträge zur Mediävistik und Renaissance-Forschung 32, München 1982, pp. 59-70.

<sup>42</sup> McKitterick, *Carolingians...*, pp. 198-200. ただし、ハンフレイ報告がアルクインやアングロ・サクソンの影響を強調しているのは、実証的な研究にもとづく見解ではなく、20世紀前半から通用していた憶測を踏襲したものであることも考慮すべきであろう。ハンフレイが着想の源として挙げているのはE. Lesne, *Histoire de la propriété ecclésiastique en France*, T. IV, *Les livres "Scriptoria" et bibliothèques*, Lille 1938, p. 784. むしろ、ハンフレイの報告では、中世初期において「図書館」とはいかなるものであったのか、利用される語彙と実際の状況について興味深い考察も含んでいる点は評価すべきである。

<sup>43</sup> 典拠の概要はMcKitterick, *Carolingians...*, p. 200以下を参照。

*illustribus* である<sup>44</sup>。これはもともとはヒエロニムスによって 392 年頃に著されたもので、いかに多くの優れた著作がキリスト教徒たちの中にあるかを異教徒たちにしめすために書かれたものだった。その中には 135 人の著作家とその著作が挙げられている。この著作はその後新しい著作家を追加する部分が付加されて拡大していく。

その最初のもは 490 年頃、マルセイユのゲンナディウスによるもので、5 世紀の著作家 91 人が追加されている。序文で述べられているゲンナディウスの執筆意図は、ヒエロニムスのそれとは違い、当時の神学的問題を解くために利用できるキリスト教著作への導入を意図し、異端のおそれがなく、教育にも利用できる著作のリストも兼ねることを意図したものである。さらにその後、セビーリャのイシドルスもスペイン人を中心に 33 人を追加している<sup>45</sup>。イシドルスの執筆動機は当時の教養状況を憂いて、その状況を改善し、この地域の正統著作家の知識を保存促進するというものだった<sup>46</sup>。このほか、中世初期にはイシドルスの付加に加えてアフリカ人の 13 人が加えられたものも流布した。これはイシドルスの 46 章のバージョンとして流布したが、おそらく 6 世紀アフリカ人によるものと推定されている。

ヒエロニムスとゲンナディウスの『著名者列伝』は一つの著作として伝承されることが多く、カロリング期の写本ではこれとあわせてイシドルスの付加も一緒に伝承されているケースも多い。この『著名者列伝』は、イシドルスの『語源学』*Etymologiae* の中でも、キリスト教著作家のガイドとして推薦されているほか、現存するカロリング期の図書館カタログの多くに記載されていることから、実際に大きな影響力をもったと考えられる。また、ムールバッハの図書館カタログの編者が利用した典拠の中でもとくに重要な役割を演じた『綱要』が『著名者列伝』と一つにまとめて綴じられているケースもある<sup>47</sup>。

<sup>44</sup> E. C. Richardson, *Hieronymus, Liber de viris illustribus. Gennadius De viris illustribus*, Leipzig 1896; Hieronymus und Gennadius, *De viris illustribus*, C. A. Bernoulli (ed.), Leipzig 1895.

<sup>45</sup> セビーリャのイシドルス『著名者列伝』兼利琢也訳『中世思想原典集成 5, 後期ラテン教父』所収, 567-599 頁。

<sup>46</sup> McKitterick, *Carolingians...*, p. 201 と同書の脚注 (100) を参照。

『著名者列伝』とならんで重要なものとして、『容認されるべき書と容認されざるべき書に関するゲラシウスの教令』*Decretum Gelasianum de libris recipiendis et no recipiendis* とよばれるものが挙げられる<sup>48</sup>。実際のところは教皇ゲラシウス1世とは関係なくガリアで書かれたとされるが、フランク全域とイタリア北部で普及していた。このテキストが提供する文献情報は、正統な知を規定することにおいて多大な貢献をし、広範囲にわたって影響力をもった。この『ゲラシウス教令』と『綱要』が一つの写本にまとめられて伝承されているケースも実際に存在する<sup>49</sup>。

また、D.ガンツはこのテキストの写本がいずれもコルビー、リュクスィユ、ソワソンの影響圏の範囲内で作成されていることから正統な知、すなわち承認されたテキストの貯蔵庫および権威の源泉としての地位をコルビーが占めていたという議論を展開している<sup>50</sup>。その他に、アウグスティヌスの『再考録』やベーダの『教会史』、カッシオドルスの『綱要』、などムールバッハの編者が用いた典拠も、当時の他の図書館での写本収集のために利用されたことも明らかになっている<sup>51</sup>。

ここまで、9世紀のムールバッハ修道院の図書館カタログとその編者の編纂の仕方、そして、8世紀から9世紀に編纂されて現在その姿を知

---

<sup>47</sup> Wolfenbittel, Weissenburg 79 と Hereford, Cathedral Library, O.III. 2. 後者はアウグスティヌスの『再考録』も含んでいる。cf. Mynors, *op.*, *cit.*, p. xiv-xv.

<sup>48</sup> E. v. Dobschütz, ed., *Das Decretum Gelasianum de libris recipiendis et non recipiendis*, Leipzig 1912.

<sup>49</sup> 9世紀ザンクト・エメランに由来する写本 München, Byerische Staatsbibliothek, codices latini monacenses, 14469. Cf. Mynors, *op.*, *cit.*, p. xvii.

<sup>50</sup> 初期の写本には、Bruxelles, Bibliothèque Royale, 9850-2, Fulda, Stiftsbibliothek, Bonifatianus 2 がある。Cf. McKitterick, *Carolingians...*, p. 203. なおマッキタリクの典拠は D. Ganz, *The Merovingian Library*, in *Columbanus and Merovingian Monasticism: British Archaeological Reports, International Series 113*, Oxford 1981, pp. 153-172, p. 161. カロリング期のコルビーについての詳細は D. Ganz, *Corbie in the Carolingian Renaissance*, Sigmaringen 1990 で包括的に論じられている。

<sup>51</sup> この点については、ミルデがムールバッハの例で論じたほか、ハンフレイ、マッキタリックらの見解も一致している。Hanphray, *op.*, *cit.*, p. 66-69, McKitterick, *Carolingians...*, pp. 192-95.

ることのできる図書館カタログについての研究成果を展望してきた。ムールバッハの図書館カタログについてのミルデの詳細な研究が示しているように、カッシオドルスの『綱要』は、この時期の図書館カタログの編者が参照する典拠として利用されており、ムールバッハの場合では図書館カタログのモデルとしても使われていることが分かっている。

### 3 『綱要』研究のあらたな視座

さいごに、これら中世初期の図書館カタログについての研究をふまえ、『綱要』を軸として今後中世初期の図書館史、書物史、読書史へアプローチするための視座について考えてみたい。大別して、伝承の問題、『綱要』のテキストの内容と写本の問題、写本の問題があるので以下、順に論じていく。

#### 伝承の問題

まず、カッシオドルスの『綱要』については、これまで注目されることが多かった自由学芸についての第2巻だけでなく、第1巻も中世に多大な影響を及ぼしており、歴史的に重要な役割を演じていたことを理解しておく必要がある。そのうえで、『綱要』が演じた歴史的な役割や中世への影響を論じるには、『綱要』の写本が、いつ、どこで、どのように知られていたのか、写本とテキストの伝承史についての正確な情報にもとづいて議論することが必要となる。テキストの内容だけを研究対象とするのではなく、テキストそのものを歴史的なものとしてとらえ、テキストの歴史、すなわちテキストの伝承を重んじる態度は、伝統的に補助学とよばれてきた諸学の領域での動向と成果に触発されたものだが、これからの研究の方向性としていまだに大きな可能性をのこしている。

ところで、テキストの歴史に主眼をおいていたわけではないにせよ、異本の比較と考証により写本の系統図をつくり、テキストのオリジナルの姿を探究することは伝統的な文献学の基本でもある。したがって、『綱要』の批判版を刊行したマイノルズも、序文において『綱要』を含む写本とそれらの系統関係を詳しく論じており、その後E. K. ランドもさらなる考証を進めている<sup>52</sup>。目的こそ異なるものの、これら写本の系統関係

についての情報は貴重なものであり、あらたな問題意識から『綱要』を研究するうえでも、調査の出発点とすべきものである。

もともと『綱要』全2巻は、著者カッシオドルスの意図としては全体で聖書研究の手引きとして書かれたもので、聖なる学についての第1巻と、世俗の学すなわち自由学芸についての第2巻はひとまとまりのものである。しかし、現存する写本から明らかにされたところでは、伝承史の初期においては各巻が独立して別々に伝承されたことが確認されている。マイノルズが挙げた中世初期の『綱要』写本のうち、全2巻が一つに綴じられて伝承された写本はわずか3点しかない。

『綱要』の日本語版には、訳者による簡潔かつ的確な解説が付されているが、この点については、R. W. サザーンに依拠して、「自由学芸が聖書研究から切り離されて独立のものとして受け入れられていった」としている<sup>53</sup>。これを直ちに誤りだと指摘することはないにせよ、現在までの研究で明らかになったことを考慮すると、より詳細に吟味する必要があるように思われる。

全2巻が揃って伝承されたのがわずかに3例しかないこと考えれば、各巻が別々に伝承されたのは、偶然であるというよりは、それが中世初期における意図的な選択だったと考えるべきであろう。ただし、聖なる学と世俗の学が切り離されていたと結論するまえに、それぞれがどのような内容を持ち、どのように利用されたのかを検討してみなければならない。

実際に『綱要』の第1巻と第2巻を通読してみると、両者は内容の点で性格がやや異なっている。第2巻の世俗の学問についての記述は、序文に続いて第1章の文法学から第7章の天文学まで、見出しに掲げられる学問がいかなるものであるかについての概要が説明されている。カッシオドルスの著作に対してしばしばいわれるように、百科事典的な知識

<sup>52</sup> Mynors, *op. cit.*, pp. ix-lvi; E. K. Rand, "New Cassiodorus", *Speculum*, 1938, pp. 433-447.

<sup>53</sup> 『中世思想原典集成5』, 334頁。R. W. サザーン『中世の形成』森岡敬一郎、池上忠弘訳、みすず書房1978年、137-138頁 (R. W. Southern, *The Making of the Middle Ages*, New York 1953)。

が収められているものといえよう。それに対して、第1巻の方は、表題になっている事柄の概説もさることながら、それについて参照すべき文献を紹介することの方に主眼がおかれている。むしろ、第2巻のような解説的な要素がないわけではないが、少なくとも第2巻のように、手ぎわよく体系的にまとめるまでにはいたっていないように思われる。

このように、2つの巻の性格が異なるとすれば、利用者の方もまったく異なる用途に用いることも十分考えられる。つまり、第1巻には、さまざまな利用法が存在したとも考えられるが、その中心的な利用法は図書館カタログを編纂する際の文献リストおよび、文献カタログ編纂の模範としての利用法であった。これは、9世紀後半のムールバッハ修道院図書館カタログの研究から明らかになったことである。

このように著作の利用のされ方や用途に着目することで、『綱要』の第1巻と第2巻が別々に伝承されている理由の手がかりを見い出すことができる。第1巻が第2巻といっしょにまとめられず、あえて切り離されているならば、どのような著作とともにまとめられているかを見れば、その用途はより明白になるはずである。

そこで、カッシオドルスの『綱要』第1巻と一緒にまとめられている著作を見ると、ヒエロニムス、ゲンナディウス、イシドルスの『著名者列伝』や、アウグスティヌスの『再考録』、『ユリアヌス駁論』、『ゲラシウスの教令』など、中世初期の図書館カタログに役立てられた文献情報の典拠といっしょに伝承されているケースが目立つ。依存の度合いは各地で差もあったであろうが、『綱要』第1巻の用途が、ムールバッハとおなじ時期の他の知的拠点で大きく異なるとは考えられない。また、現存する写本もそれを裏づけている。今後の研究では、テキストや写本の伝承史と著作の用途との関連をつねに考えておく必要があるだろう。

### 『綱要』の内容と写本の問題

その一方で、テキストの内容とその解釈についても別の角度から吟味する必要が生じてくる。近年さかんになってきている読書の歴史においては、テキストの意味を決定する要因の一つとしてそれを読む読者にも大きな役割が与えられている<sup>54</sup>。そのような視点から『綱要』のテキストを研究するには、カッシオドルスの意図や、著作が成立した6世紀の知



的、文化的状況ばかりでなく、その後の時代に『綱要』を読んだ読者たちや、かれらの知的、文化的状況をも考慮しなければならない。

そして、ここまで見てきたように、9世紀のムールバッハ修道院の図書館カタログの編者は『綱要』第1巻の読者であり、この時期の他の図書館カタログの編者の何人かもその読者と見なすことができよう。かれらが『綱要』を利用したのは、図書館カタログをどのように作成すべきかを参考にするためであったり、他所から収集するか、自らのスク립トリウムで作成して図書館に備えるべき著作を調べるためであった。このような仕事に携わった読者は、『綱要』読者のうちの一部であるかも知れないが、いまやその姿をはっきり知ることのできる読者たちである。

『綱要』読者をカロリング期の図書館カタログ編者に限定してはならないが、部分的にせよ読者像が明らかになったことは、『綱要』テキストの内容を検討するうえでも新たな視座をあたえてくれる。つまり、中世初期における『綱要』テキストの読者やその用途をふまえることで、『綱要』テキストの内容が中世初期においてどのような意味をもったのか、適切に評価できるようになった。

また、図書館カタログの編纂方式が洗練していくのとおなじ時期、いくつかの修道院では、それまで他所から入手して蔵書を拡大していた状況が変わり、自分たちの修道院のスク립トリウムで活潑に写本を作成するようになる。カタログ編者たちが『綱要』を利用したのはまさにこのような時期においてである。そして、かれらが参照した『綱要』第1巻には、書くことや写本作成についての工夫や助言が豊富にある。『綱要』の成立時から9世紀ころまでを見渡しても、写本製作についてこれほど具体的かつ豊富に記述されている著作は例がない。

ならば、カッシオドルスが説明した写本製作のための工夫や助言は、修道院の自前の写本作成の活発化に刺激をあたえ、写本作成の現場にも

---

<sup>54</sup> テキストの意味の決定における読者の役割を重視する立場は、文学批評などの分野からR. シャルティエを中心に歴史学にも導入されていることは周知の通りである。シャルティエ『書物の秩序』長谷川輝夫訳、ちくま学芸文庫、1996年（とくに第1章「読者共同体」19-54頁）を参照。また、読書の歴史について、中世も扱ったものとしてR. シャルティエ、G. カヴァッロ編『読むことの歴史』田村毅ほか共訳、大修館書店、2000年がある。

何らかの着想をあたえたのではなかろうか。その可能性は十分に考えることができるが、実証することはむずかしい。何らかの方法を考えるとすれば、ムールバッハなど『綱要』が知られ、活用されていた修道院で作成された現存の写本を調査して、『綱要』の中にある写本製作の助言が何らかのかたちで反映されているかを吟味するのも一つの方法である。

また、カッシオドルスの助言にもとづいて製作された写本がどのような姿であったかについては、『綱要』に記されている内容ばかりでなく、ウィウアリウム修道院に起源をもつ現存の写本からその姿を見ることができであろう。直接ないし間接的にウィウアリウムに起源をもつ写本については、歴史的に重要な多くの写本が含まれているため、これまでさかんに議論されたが、收拾のつかないほどに見解が分かれてしまっている<sup>55</sup>。しかし、写本研究の発展とともに検証作業と議論の整理が行われ、1998年の時点で、直接ないし間接的にウィウアリウムに由来すると専門家の意見が一致している写本が選別されている<sup>56</sup>。このような点をもみても、中世への影響という観点から『綱要』を研究対象とする機が熟してきたといえよう。

## おわりに

本稿では、近年の写本研究や中世初期の研究の進展をうけて、カッシオドルスの『綱要』の新たな研究の可能性を検討した。とくに、『綱要』が中世初期にどのように利用されたのかを明らかにしたムールバッハ修道院の図書館カタログについての研究をとりあげ、カタログ編者が図書館に所蔵すべき著作を調べるために『綱要』の第1巻を利用したこと、さらにカタログを編纂するうえでも、一部は『綱要』をモデルにしていることをみてきた。

おなじ頃、各地の図書館でもカタログが編纂されはじめ、写本伝承から考えて『綱要』第1巻はおそらくムールバッハの場合とおなじように

---

<sup>55</sup> 濫立する学説のうち主だったものだけでも相当の量にのぼる。cf. F. Troncarelli, *op. cit.*, pp. 39-40, note 1.

<sup>56</sup> *Ibid.*, pp. 95-96, Appendice A, B.

文献情報を得るために各地で利用されたと思われる。カタログの編纂方式が洗練され、写本生産が活発化し、図書館が拡充していくこの時期は、西欧図書館史の発展の時期といえることができる。しかし、それは図書館史だけの問題にとどまるものではない。所蔵すべき著作の情報を集め、写本を収集、生産した図書館やスク립トリウムは、つづく時代の知的活動のための基盤を提供したのである。

したがって、必要な著作を取捨選択し、書物の分類の仕方を築きあげていった図書館カタログ编者やその周辺の人々、およびその典拠史料は、つづく時代の知のゆく先を示し、その枠組みを規定したともいえる。それは、社会のなかで書かれたことばがよりいっそうの力をもっていく時代に不可欠なプロセスだった。カッシオドルスの『綱要』第1巻はそのために活用されたのであり、その影響の研究は中世初期の知的活動を解明するうえで大きく貢献することができるだろう。

\*本稿は、平成15年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。